

初期フライブルク期のハイデガー哲学と意味の段階性

君嶋泰明

はじめに

『存在と時間』が公刊される1927年から遡ること8年前、ハイデガーは、フライブルク大学の私講師として彼のキャリアをスタートした。この1919年から1923年までの5年間は初期フライブルク期と呼ばれ、その間に行われた数々の講義の草稿がこの四半世紀余りの間に相次いで公刊されたことにより、少なからぬ研究者たちの注目を集めてきた。その動機の一つは、『存在と時間』に散見される特異な術語群やその独特な問題設定を、そこに至るまでの経緯を追うことによって理解することであろう。本稿は、この『『存在と時間』の起源』(Kisiel, 1993)の研究に対する一定の寄与を意図するものである。具体的には、この時期の諸講義のうち、アリストテレス解釈が明示的に開始される1922年以前のもを多少とも網羅的に視野に入れ、そこで語られていた様々なことを一つのかたちにして再構成することが、本稿の目的である。そのさい、そうした語りで前提されていると思しきある考え方が「意味段階 (Sinnstufe)」と名付けられ、論述の中心的な役割を果たすことになる。だがそれについては後述にまかせ、本論に入る前に、上述の「かたち」がどのようなものになるのか、少々長くなるが、その見通しを示しておく。

初期フライブルク期の諸講義の主題は、煎じ詰めれば「哲学とは何か」という一点に集約される。そのことは、各講義の冒頭を読めば、少なくとも外面的には容易に確認することができる。とはいえ、主題においては比較的確りきりしているこれらの講義だが、その内実は、この「哲学とは何か」の外堀を埋めるといった趣で、実に様々なことが語られており、それらを包括的に理解することは必ずしも容易ではない。そこで、ここではまず、この「哲学とは何か」の典型的な扱い方が表れていると思われる1921/22年冬学期講義における次の一節を読み解くことで、本稿なりの端緒を開くことにしたい。

哲学のうちには二つの問いがあり、それはあからさまに言うとな次のようになる。1. 主要事 (Hauptsache) は何か。2. それへと本当に向けられた問題設定とはいかなるものか。結局何の話なのか。哲学においては原理上あくまで何の話がされるはずで、されるのが望まれ、されねばならないのか。

ある具体的に規定された、哲学的な研究の問題は、それが真正のものであれば、そ

の目標への方向において、終わりまで通じているだろう。その終わりは、哲学が哲学であるからには、自らに対して探り当ててしまっているはずのものである。哲学とは何か。この問いは、もしあらゆる具体的な探求が、自らの確実な方向性と、それに対応する方法上の入念さ、真正に事象に即していること (echte Sachlichkeit)、これらを持つべきであるなら、十分に明晰にされていなければならない。この問いが立てられる状況と問題性にとって十分に明晰に。(ebd., S. 12)

ここでハイデガーは、一方で、ある「主要事」の話をするを哲学のなすべきことと見なし、そのような話をするに至っていることを、「哲学とは何か」という「終わり」を「探り当ててしまっている」と重ね合わせている。すなわち、ここで彼は、「哲学とは何か」という問いを、この「主要事は何か」という問いと実質的に同等のものとして見なししている。だが他方、ここでこの問いは、「あらゆる具体的な探求」のある種の理想的な在り方を確保する「べきであるなら」、「この問いが立てられる状況と問題性にとって」「十分に明晰にされていなければならない」問いとして語られてもいる。一般に「主要事」とは、何らかの問題を解決しようとするときにまさに「主要事」となる事柄を表す語であり、したがって、何らかの「問題設定」があってはじめて、「主要事は何か」という問いは「明晰」になると言える（何も解決すべき問題がないにもかかわらず、「明晰」に「主要事」を問うことなどできないだろう）。だとすると、ここでハイデガーは、一方で哲学が扱うべき「主要事」を見据えつつ、他方で次のことを言わんとしていると考えられる。すなわち、「あらゆる具体的な探求」のある種の理想的な在り方を確保するうえで「主要事」となる事柄があるのだが、しかしそれを「明晰」な私たちで問うためには、そもそもまず、この理想的な在り方を確保するうえで解決されねばならない問題は何なのか、という「問題設定」がなされねばならない、と。

本稿が以下で行いたいのは、この時期のハイデガーが、「哲学とは何か」という問いをこの「主要事は何か」という問いとして主題化していたということを示すことである。具体的には、彼がこの問いを「明晰」な私たちで問うために行っていたと考えられる「問題設定」の内実を明らかにし、最終的に、この「問題」の解決における「主要事」をそれとして捉えることが哲学の「定義」とされていることを示すことになる。

本論に入る前に、以下の流れを要約しておきたい。本論においては、上述の問題がまさに問題となるポイントをより見えやすくするための本稿独自の試みとして、「意味段階」という造語を導入する。この語は、ハイデガーの術語である「意味 (Sinn)」に含まれるある種の段階性を明示化することを意図しており、本稿の目的を達成するうえで重要な役割を

果たすことになる。このようなわけで、本論は「意味」の解説から始めることになる。

ハイデガーにおいて意味とは、ある状況下であるひとにとって接近可能なものの接近可能性を表す術語である。彼は、あるものが意味を持つということを、それが接近可能であるということと見なすのである（1節）。接近可能なものの中には、大まかに言って、経験によってのみ接近可能なものと、認識によってのみ接近可能なものの二種類がある。そして、認識は経験がある種の変容を被ることによってはじめて可能となるため、両者は、接近可能性にかんする二つの段階をなしていることになる。この段階を本稿は意味段階と呼ぶことにする（2節）。この意味段階を考慮に入れると、あらゆる探求が満たすべき制約として、次のことが見えてくる。すなわち、あらゆる探求は、認識の意味段階ではじめて接近可能となるものを、あたかも経験の意味段階ですでに接近可能であるかのように提示してはならない。ハイデガーは、この制約の見過ごしが常態化していることを、ある「広く行き渡った理論」に即して例示してみせる（3節）。さて、ハイデガーの診断によれば、この見越しの「根」はギリシアにある。彼は、一般に「カテゴリー」というものを、そのギリシア語の原義に従い、任意の意味段階で接近されるものを「解釈（interpretieren）」し、了解へともたらし、議論の俎上に載せること、あるいはそのようにして載せられた当のものとして理解する。このカテゴリーが解釈するものには本来、経験と認識いずれの意味段階で接近されるものも含まれるのだが、ハイデガーによれば、ギリシア以降、経験のカテゴリーが失われてしまった。上述の理論が犯しているような見ごしは、そのような議論の場で経験について論じようとすることにより生じたものであり、ハイデガーは、この議論の場の「根」をギリシアに見てとるのである（4節）。したがって、「あらゆる具体的な探求」は多かれ少なかれ、自らが俎上に載せようとするもの、カテゴリーとしてのそれが、本来いかなる意味段階で接近可能となるものなのかということを、明らかにすることを必要とする。これが上述した「問題」である。一方、この問題の解決は、当該カテゴリーに接近するという「振る舞い（Verhalten）」を実際に持つことができるかどうかにかかっている。すなわち、ここでの「主要事」は、この振る舞いを持つようとする者をして、この振る舞いを持つ者としての自分自身を了解せしめ、そのような自分自身へと接近せしめるような、そのようなカテゴリーである。あるいはより詳しくは、そのようなカテゴリーとしての自分自身への接近可能性、すなわちその意味である。ハイデガーは、このことを主要事としつつ上述の問題を解決することを哲学の「定義」とし、この主要事への問いに、「哲学とは何か」という問いを重ね合わせるのである（5節）。

1. 意味：あるものの接近可能性

ハイデガーは、初期フライブルク期の諸講義のうち、少なくとも本稿が扱うテキストにおいては、「意味」に対する明確な規定を与えてはいない。しかし本稿の見るところ、『存在と時間』における次の規定は同テキストにも適用可能である。

世界の内部の存在者が […] 発見されているとき、つまり了解されるに至っているとき、我々は、この存在者は意味を持っている、と言う。しかし厳密にとれば、了解されているのは意味ではなく、存在者、あるいは存在である。意味とは、何かの了解可能性がそのうちで保持されているものである。了解しながら開示することにおいて分節されうるもの、これを我々は意味と名づけるのである。(Heidegger, 2001, S. 151)

このように、ハイデガーにおいて意味とは、了解されている、という仕方で存在しうる存在者を包括するための術語である。

他方でハイデガーは次のようにも言っている。「我々が、存在者は「意味を持っている」と言うとき、そこで言わんとされているのは、存在者がその存在において接近可能となっている、ということである」(ebd., S. 324)。このことから、彼が少なくとも意味の規定にかんして、「了解可能性 (Verständlichkeit)」と「接近可能性 (Zugänglichkeit)」を互換的に用いていることが分かる。意味とは、あるものの接近可能性を表す術語である。

とはいえ、これだけではまだイメージが湧きにくいと思われるので、具体例に即して考えてみよう。ハイデガーは、1919年戦時緊急学期講義において、聴講者たちの注意を教壇に向けて、「私」は何を見ているだろうか？」と問うてから、次のように述べている。

私は、私がそこで話をすべき教壇を見ており、あなたがたは、そこからあなたがたに話しがなされる教壇を、そして私がすでにそこで話をした教壇を見ている。(Heidegger, 1999, S. 71)

そして、今度は「自分の小屋から突然ここへ連れてこられたセネガル人」が見るであろうものについて、次のように述べている。

彼が、この対象を凝視して見るであろうものを、個々に言うことは難しい。それは、何か魔術に関係するものかもしれないし、矢や投石から身を守るためのものかもしれない。しかし最もありそうなのは、彼にはそれで何をすればいいのか分からない、ということであろう […]。(ebd., SS. 71-2)

本稿がこの二つの引用の対比によって理解を促したいのは、ある特定の状況下を生きるひとにとって第一義的に接近可能なものは、常に何らかの制約を受けている、ということである。上の例で言えば、ハイデガーや聴講者たちにとって接近可能な「教壇」は、セネガル人にとっては「何をすればいいかわからないもの」であり、したがって接近可能ではない（そして別の状況下で逆のケースが成り立つことも十分に考えられるだろう）。このことは明らかに、ある状況下における各人の生に課される、接近可能なものにかんする制約の存在を示している。ハイデガーにおいて意味とは、この制約によって規定された、そのつどの接近可能なものを包括する、言わば地平のようなものである。

2. 経験と認識：接近可能性の二段階

すでに述べたように、ハイデガーは、経験と認識という術語を、あるものへの接近の二つの仕方として用い、経験が変容することによってはじめて認識が可能になると考えている。まずは、経験がどのように規定されているのかを見よう。彼は、1919/20 年冬学期講義において次のように述べている。

我々が——誰もが、事後的生において、これこれのものと出会うという事実、あるいは、彼にこれこれの出会いが「ふりかかる」という事実、彼がこれこれのものを知るに至り、それが彼に感銘を与え、彼に衝撃を与えるという事実、彼が「ある他の人物のとりこになる」という事実、これらの事実を、我々は「経験すること (er-fahren)」と呼び、生の進行 (Fahrt) において戦い取ること、見いだすことと呼ぶ[……。](Heidegger, 1993a, S. 67)

このように、各人の生の進行において出会い、ふりかかる「もの」や「人物」が、戦い取られ、見いだされること、これが、ハイデガーが経験に与えるもっとも基本的な規定の一つである。この規定は少々大げさに見えるが、1 節で見た「教壇」が、ハイデガーや聴講者たちによってまさに「経験」されたものであることを考えれば、この規定が、むしろ我々にもっとも身近な接近の仕方と与えられたものであることが分かるだろう。ハイデガーや聴講者たちが見るものが「教壇」であって、「何をすればいいかわからないもの」でないのは、彼らが自らの生の進行において、それを「教壇」として（言わば）戦い取り、見いだすからなのであって、それはセネガル人にはできないことなのである。

ところで、このことから分かるように、ハイデガーにおいて、経験されるものは「何

であるか (Was)」を問うるものであり、ある「内容 (Gehalt)」を持っている。1920/21年冬学期講義においてハイデガーは、経験は、この「内容」に加え、「関連 (Bezug)」と「遂行 (Vollzug)」というさらに二つの観点を許すとしている(Heidegger, 1995, S. 63)。このうち関連とは、1920年夏学期講義の端的な表現を用いれば、経験される内容への「接近関係 (Zugangsbeziehung)」(Heidegger, 1993b, S. 60) のことである。再び教壇の例で言うと、同じ教壇という内容であっても、それへの接近関係には、それを「見る」という関係や、そこで「立って話をする」という関係、あるいはそれを「雑巾で拭く」という関係など、様々なものがありうる。経験は、ある「内容」へのこのような多様な「関連」の「遂行」として、分析することができるのである。

さて、ハイデガーは、この「関連」には大きく分けて二つのタイプがあり、それぞれには排他的に接近可能な内容が対応しているとする。その一つが「経験」であり、もう一つがいまから見る「認識」である。彼は1919年戦時緊急学期講義において次のように述べている。

〔認識されるもの〕は、私の認識する自我 (mein erkennendes Ich) の前を端的に通る過ぎるのであり、この自我に対しては、認識されているという関連しか持っていない。このように色あせた、最小限の体験にまで縮減された、自我との関連づけしか持っていないのである。次のことは、事象と事象連関の本質である。すなわち、認識、言い換えれば理論的ふるまいにおいてのみ、またまさにそこにおいて、自らを与えるということ、それも理論的な自我に対して与えるということである。(Heidegger, 1999, S. 74)

このように、認識は、その関連が「最小限の体験にまで縮減された」ものである点で、経験とは区別される。逆に言えば、より豊かな体験のなかで遂行される経験が持つ関連がこのように変容することによって、はじめて認識が可能となる。そしてこの変容とともに、「事象」や「事態」のような経験に対しては決して姿を見せない内容が、新たに接近可能となるのである。

ハイデガーはこの「事象」の例として、天文学において探求される「日の出という現象」を挙げ、これを「テーバイの長老達のコロスの体験」(ソフォクレス『アンティゴネー』)と対比させている(ebd.)。この体験は、「勝利に終わった防衛戦争後の最初の穏やかな朝に昇る太陽を眺める」というものであるが、ここで長老達が持つ関連によっては、天文学者によって認識される限りでの「日の出」に接近することはできない。そのためには、彼らが「昇る太陽」へと持っていた関連を「最小限の体験にまで縮減」し、それを純粋に事象

として見なければならぬのである。

さて、以上から明らかなように、ハイデガーにおいて、経験と認識はそれぞれに特有の接近可能性を持っており、しかも、認識による接近可能性を獲得するためには経験が持つ関連を変容させなければならぬという点で、二つの接近可能性は段階をなしている。それゆえ、1節で見た接近可能性としての「意味」は、それ自身、このような段階性を孕んでいるということになる。以下では、この段階性を明示化するためにしばしば「意味」の代わりに「意味段階 (Sinnstufe)」という造語を用い、論述の助けとしていくことにしたい。

3. 自然と価値：接近可能性にかんする制約の見過ごし

1節の最後に、意味とは「接近可能性にかんする制約」であると述べたが、この制約は、2節で見た意味の段階性を考慮に入れると、次のことを含意することになる。すなわち、認識の意味段階で接近されるものは、あくまでそこではじめて接近可能となるものなのだから、それをあたかも経験の意味段階で接近可能であるかのように提示してはならない。ハイデガーは、1921/22年冬学期講義において、この制約の見過ごしを常態化していることを、ある「広く行き渡った理論」(Heidegger, 1985, S. 92)に即して例示している。以下ではそのことを見ていこう。

ハイデガーによれば、この理論は、さしあたり「自然対象 (Naturgegenstände)」が「裸の現実性」として存在しており、それに後から「経験の経過において価値性格が着せられる」、というような主張を含むものである(ebd., S. 91)。この理論が「広く行き渡った」ものであることを確かめるためには、1節で見た教壇の例を考えてみればよい。そこで見たことは、ハイデガーたちにとって接近可能な「教壇」という内容は、「突然連れてこられた」セネガル人にとってはそうではない、ということであった。これに対して、あるひとが次のような反論をしたとしよう。すなわち、「ハイデガーたちもセネガル人も、接近しているのは同じ木片であって、それが後から「教壇」や「何をすればいいかわからないもの」と見なされているにすぎない」。この反論は一見してもっともらしく思えるし、もしもハイデガーに反論すべき立場に置かれれば、我々自身もそう主張してしまおうである。だが容易に見てとれるように、ハイデガーによれば——これは1919年戦時緊急学期講義ですでに示唆されていることなのだが——、まさにこのような反論こそ、上述の理論の主張、すなわち、第一義的に接近可能なものという地位にあるのは木片なる「自然対象」(Heidegger, 1999, S. 71)であり、それに後から(ある種の)「価値性格」が着せられている、という主張にほかならない。このように、この理論は、我々の素朴な直感に浸透しているように思えるほど広く行き渡ったものである。

そしてこのことは、ハイデガーからすれば、上述の制約がいかに広く見過ごされているかということの証左である。というのも、彼の見るところでは、こうしたいわば裸の対象という意味での「自然」は、意味段階的に最初に来るものでは決してなく、むしろ、「生きられ、経験され、出会われる世界について、それが対象であるということの根本意味 (Grundsinn des Gegenstandseins) があり、そこからはじめて自然という対象性は生じる」(Heidegger, 1985, S. 91; 傍点引用者)からである。上述の理論は、木片という「自然対象」に意味段階的に先行する、「生きられ、経験され、出会われる」ものと、それへの接近可能性をなす「根本意味」を、暗黙裏に飛び越えてしまっているのである。またハイデガーによれば、このような意味での「自然」に着せられるものとしての「価値」も、「同様に、それ自身からすれば、ある特定の仕方では形を整えられることによって、はじめて具体的な世界経験から際立たせられうる」(ebd., S. 92)。したがって、「自然」や「価値」といったものはいずれも、認識の意味段階ではじめて接近可能となる理論的な派生物であり、それらをあたかも経験の意味段階で接近可能であるかのように語るこの理論は、上述の制約を見過ごしているということになる。ハイデガーに言わせれば、この理論は「意味発生的 (sinngenetisch) な諸連関が逆向きになっている」のである(ebd.)。

4. カテゴリー：接近可能なものの制約の見過ごしの根

さて、ハイデガーは、3 節で見た理論の「根」がギリシアにあると見る。具体的には、ギリシアにおいて「生き生きとしていた」ところの、「発端となる二つの動機 (根源的な経験の展開とカテゴリー的で理論的な展開)」のうち、「一方が端的に、根源的なものの平板化の過程で失われてしまった」結果として、このような理論が蔓延ることになったというのが、ハイデガーの診断である(ebd.)。それがどういうことかは、ハイデガーが一般に「カテゴリー」というものをどう理解しているかを知ることで、明らかとなるだろう。

ハイデガーは、カテゴリーをそのギリシア語の原義に従って理解している。そのことを見るために、ここでは再び『存在と時間』を引用したい。

存在者について論じ合うこと (ロゴス) において、そのつどすでに先行的に存在について言及されていること、これがカテゴリーレスタイである。このカテゴリーレスタイが差し当たり意味しているのは、公に弾劾すること、皆の前で誰かに何かを指摘することである。存在論的に使われるときには、この術語は次のことを意味する。すなわち、存在者に、それがそのつどすでに存在者として何であるのかを指摘すること、言い換えれば、何であるかを皆に見えるようにすることである。そのように見ること

において見てとられたもの、見えるようになったものが、カテゴリーアイである。このカテゴリーアイは、ロゴスにおいて様々な仕方で論じられ、論じ合われる存在者の、アプリアリな諸規定を包括している。(Heidegger, 2001, SS. 44-5)

このように、何らかの存在者について論じ合うときに、論じ合う者たちに対して、その存在者が「何であるか」が見えるようになっていること、それをそのようなかたちで議論の俎上に載せることを、ハイデガーは「カテゴリーレイスタイ」と呼び、そのようにして俎上に載せられた当のものを「カテゴリーアイ」と呼ぶ。これらが、ハイデガーが理解する「カテゴリー」の基本的な語義である。

他方、この俎上に載せられ論じ合われるものは、それ自身、その議論の場においてはじめて登場するものではなく、すでに特定の意味段階で接近されていたものが、改めて議論の場へともたらされるものである。ハイデガーは特定の意味段階で何かに接近することを「現象」と呼ぶのだが(Heidegger, 1995, S. 63)、彼はこの「現象」という語を用いつつ、1920/21年冬学期講義において次のように述べている。

[...] カテゴリーとは、ある現象を、一つの意味方向において、特定の仕方で、原理的に解釈する (interpretieren) 何かであり、被解釈項 (Interpretat) としての現象を了解へともたらす何かである。(Heidegger, 1985, S. 86)

このように、カテゴリーとは、何かに接近するという「現象」を解釈し、それがどういうことかを了解させるような何かなのである。なお、このことに対応して、以下ではカテゴリーについて論じるさい、それが解釈する現象が経験と認識どちらの意味段階のものであるかを明示する必要がある場合には、「経験のカテゴリー」ないし「認識のカテゴリー」という表現を用いることにする。

さて、以上を踏まえて、本節冒頭で示したハイデガーの診断をもう一度見てみよう。彼はまず、「発端となる二つの動機 (根源的な経験の展開とカテゴリー的で理論的な展開)」がギリシアにおいては「生き生きとしていた」と述べている。これはいま見たことと考え合わせるなら、次のように言い換えることができるだろう。すなわち、ギリシアにおいては、まず一方で、経験の意味段階で接近されるものについて論じるという、それ自身「生き生きと」動機づけられた「カテゴリー的で理論的な展開」があった。そして他方で、この議論の場で俎上に載せられる経験のカテゴリーが、自らの「根源」としての「経験の展開」を解釈するものであることによって、この経験の展開の動機もまた「生き生きと」し

たまま保たれていた。

では、これに続けて言われる、この二つの動機のうち「一方が端的に、根源的なものの平板化の過程で失われてしまった」とはどういうことだろうか。まず、「根源的な経験の展開」の動機が失われたとしてみよう。すると、議論の場は成立しており、何らかのカテゴリーが俎上に載せられているのだが、それは何ら経験の展開を解釈するものではない、ということになる。では次に、「カテゴリー的で理論的な展開」の動機が失われたとしてみよう。すると、何らかの経験は展開しているものの、それを解釈する経験のカテゴリーが俎上に載せられるような議論の場は成立していない、ということになる。さて、ハイデガーは「一方が […] 失われてしまった」と言うことで、このどちらを意図しているのだろうか。おそらく、彼は「前者」や「後者」ではなく「一方」と言うことによって、そのどちらをも意図しつつ、次のことを言わんとしているのではないか。すなわち、議論の場は成立しているのだが、そこで俎上に載せられているものは、何ら経験の展開を解釈しない認識のカテゴリーであり、したがって、経験のカテゴリーが俎上に載せられるような議論の場は成立していない。もっと端的に言えば、議論の場から経験のカテゴリーが「失われてしまった」、と。

ハイデガーは、3 節で見た制約の見過ごしを、このように俎上に載せられるものが認識のカテゴリーに限定された議論の場で経験について論じようとすることによって生じたものと見なし、この議論の場そのものの「根」を、ギリシアに見てとるのである。

5. 哲学：接近されるものの意味とそれに接近する振る舞いを持つことの意味

この議論の場がどの程度の広さと深さにおいて浸透しているかは、容易に計り知れるものではない。それは、3 節で見た「広く行き渡った理論」の性格から窺い知れるように、あらゆる議論の場が潜在的にはそうした議論の場であると言ってもよいほどである。それゆえ——本稿のはじめに述べておいたことを思い出されたいが——「あらゆる具体的な探求」は、自らが俎上に載せようとするもの、カテゴリーとしてのそれが、本来いかなる意味段階で接近可能となるものなのかを明らかにするという「問題」に、(少なくとも潜在的に) 直面している。

この問題の解決は、当該カテゴリーで解釈されるものに実際に接近することができるかどうか、この接近するという「振る舞い (Verhalten)」を実際に持つことができるかどうかにかかっている。すなわち、この問題を解決するうえでの「主要事」は、この振る舞いを「持つ」ということへの接近可能性、すなわちこの「持つ」ということの「意味」である。

ハイデガーは、このことを主要事としつつ上述の問題の解決を目指すこと、これが哲学

の「定義」であるとする(ebd., S. 60)。彼はそのことを 1920/21 年冬学期講義においてはっきりと述べているので、ここではそれを引きたいのだが、その前に二点、術語にかんする注記をしておかなければならない。まず、彼は「存在 (Sein)」と「存在者 (Seiendes)」という術語を用いるが、ここでは「存在」はカテゴリーを、「存在者」はそのカテゴリーで解釈されるものを、それぞれ形式的に表したものであると理解されたい。次に、ここで哲学は「認識する振る舞い」とされるが、それは字義通りにではなくむしろ「明らかにする (erhellendes) 振る舞い」と解されるべきであると、ハイデガー自身が別の箇所述べているので(ebd., S. 54)、ここでもそれに従う。さて、ハイデガーが述べる哲学の定義とは、次のようなものである。

哲学は、存在 (存在の意味) としての存在者 (Seiendes als Sein (Seinssinn)) へととる原理的に認識する振る舞い [すなわち原理的に明らかにする振る舞い] であり、しかもそれは、この振る舞いにおいて、この振る舞いにとって、この振る舞いを持つことのそのつどの存在 (存在の意味) (das jeweilige Sein (Seinssinn) des Habens des Verhaltens) が決定的に重要である、という仕方で、そうなのである。(ebd., S. 60)

ハイデガーは一般に「…へと振る舞う (sich verhalten zu ...)」ことを「関連のことである」とし(ebd., S. 52)、実質的に「…へと接近する」ことと同一視するので、そのことを踏まえてここではこの定義を読み解いていきたい。まず、「存在 (存在の意味) としての存在者へととる原理的に認識する振る舞い」とは、「それが何らかのカテゴリー (存在) で解釈されるものである限りで、あるもの (存在者) へと接近しつつ、当該カテゴリーで解釈されるべきものが一般に接近可能となる意味段階 (存在の意味) を明らかにする振る舞い」ということだろう。これは上述した「問題」の解決にあたる。では、「この振る舞いを持つことのそのつどの存在 (存在の意味) が決定的に重要である」とはどういうことか。これは、「この振る舞いを持つととする者をして、そのつど、自分自身をこの振る舞いを持つ者として了解せしめ、そのような自分自身へと接近せしめるような、そのようなカテゴリー (存在) が、あるいはより詳しくは、そのようなカテゴリーへの接近可能性が、すなわちその意味 (存在の意味) が、決定的に重要である」ということだろう。要するに、カテゴリーの意味を明らかにするという振る舞いを持つことが哲学であるが、そのさいの「主要事」は、この哲学するという振る舞いを持つことのカテゴリーの意味である、ということである。定義をこのように理解することで、ハイデガーにおいてこの「主要事」への問いが「哲学とは何か」という問いに重ね合わされていることが分かるだろう。このことでもって、

ひとまず本稿の目的は達成されたとしたい。

おわりに

最後に、以上で要約的に論じてきたこの時期のハイデガーの語りを理解するうえで（あるいはそれが本当に理解しうるものかどうかを考えるうえで）重要になる、本稿が論じきれなかったことを二点挙げ、結びとしたい。第一に、以上のことの理解は、結局のところ次のことがどれだけ具体的かつ深刻に受け止められるかどうかにかかっているが、本稿はそのための方策を十分に検討できてはいない。すなわち、およそ議論の俎上に載せることができるようなものは全て、それがそこでのみ接近可能であるような意味段階を持つということ、しかし、ギリシア以降、構造的にそのことが見過ごされてしまうような議論の場が浸透してしまっているということである。そして第二に、本稿は、カテゴリーが持つ「議論の俎上に載せられたもの」という側面を強調してきたが、おそらくハイデガーは、一般に何かに接近するということが成り立つときにすでに、何らかのカテゴリーの了解がなされていると考えている。5節で引いた哲学の定義に現れる、「振る舞いを持つことのそのつどの存在」という表現は、何かに接近する振る舞い一般がその了解に基づいて成り立つようなカテゴリーを指し示すものだと考えられる。この論点をも含むかたちで論述を組み立てることは、本稿ではできなかった。仮に、ハイデガーが「存在」という表現を一般にそのようなものとして理解しているとしたら、本稿が示したいわばカテゴリー論としての哲学の定義は、そのまま『存在と時間』において提示される存在論としての哲学の課題に直結することになるだろう。そのことを示すことも含めて、以上の二点を今後の課題とすることで、本稿は閉じたい。

文献

- Heidegger, M. (1985). *Phänomenologische Interpretation zu Aristoteles. Einführung in die phänomenologische Forschung*, Gesamtausgabe Band. 61, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (1993a). *Grundprobleme der Phänomenologie*, Gesamtausgabe Band. 58, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (1993b). *Phänomenologie der Anschauung und des Ausdrucks*, Gesamtausgabe Band. 59, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (1995). *Phänomenologie des religiösen Lebens*, Gesamtausgabe Band. 60, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann.
- (1999). *Zur Bestimmung der Philosophie*, Gesamtausgabe Band. 56/57, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 2. Auflage.
- (2001). *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 18. Auflage.
- Kisiel, T. (1993). *The Genesis of Heidegger's 'Being & Time'*. Berkeley: University of California Press.

〔京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員〕